

「元気いっぱい・笑顔いっぱい」

特別支援教育統括コーディネーター 加賀谷 勝

「保護者の心が動いた」

先日、ある園で保護者にお子さんの早期療育を勧めるために面談をしました。行動に移すまで時間がかかると思っていたのですが、面談の3日後に療育機関を見学して利用することを決めました。なぜ急に保護者の気持ちに変化が表れたのか、その背景を探ります。

1 子どもの実態（3歳児クラス）

言葉の遅れの最低ラインは、2歳まで発語がない、3歳までに2語文が話せないとされている。本児は好きな物の名前は言えるが、発音が不明瞭であり、2語文で話したり、他者と言葉でのやり取りしたりすることが難しいため、自分の思いが伝わらないと友達に手が出てしまうことがある。

2 保護者との面談

(1) 最初に私が伝えたこと

2月に対象児を見た様子と、保護者面談の前日に見た様子を比較し、言葉が増えたこと、笑顔で近付いて来てくれたこと、大好きな車や絵本を見せてくれたことなど、成長した姿を具体的に紹介した。家で読み聞かせをしている保護者の頑張りにも触れた。

(2) 園が伝えたこと

これまで保護者面談や保育参観等を利用して子どもの気になる様子を伝えていた。面談当日は、普段の様子が分かるように、楽しく活動している写真や上手に作った製作物を提示し、子どもの成長と一緒に喜ぶとともに、かけがいのない存在であると伝えた。

(3) 早期療育の必要性を伝える

以前作成した「子育てが楽しくなるQ&A」や「保護者応援ガイド」の資料を見せながら、言葉や友達との関わりに課題があることを伝えた。そして、医療、福祉、教育の関係機関がつながって支援体制が整備されており、早期に療育機関を利用することでお子さんの力を最大限引き出すことができると説明した。

保護者は子どもの問題に気が付いている場合が多い。しかし、問題がないということにしたい、心配はないと思いたいのである。人は自分が恐れていることを認めたくない、逃げたいという感情がある。特性の強い子どもの両親が夫婦で信頼し合っている、親類に悩みを聞いてくれる人がいる、園や学校に相談できる人がたくさんいれば、子どもの特性を受け入れやすい。人は自分の味方になってくれる人が多ければ多いほど、相手を信じやすくなる。「自分はこの人なら信じてもいい」と保護者が相手を信頼できるような関係にならないと、よくないことは伝えづらい。園や学校の先生が伝えるよりも、第三者から伝えてもらうことでスムーズに行く場合がある。大切なことは、伝え方の技術ではなく、保護者に対する思いやり、保護者の立場に寄り添う姿勢、子どもの成長を共に喜ぶ姿、そして、関係機関とつながることである。



とれたて直送便



【通級指導教室担当者が動いた】

淳城南小学校、第四小学校、湖北小学校、能代第二中学校の通級指導教室を担当している先生方が、「能代山本通級担当者学習会（仮）」という自主的な研修会を立ち上げた。先日、能代第二中学校の金子先生が「ソーシャルスキルトレーニング」を紹介する学習会を見学した。参加者は「山と海」等、2つのうち好きな方を選んだ理由を説明し、更に選んだ理由を掘り下げたフリートークで盛り上がった。6月に能代市の「特別支援教育学級担任等研修会」では、金子先生と第四小学校の田崎先生の実践紹介を予定している。通級担当者の実践を通して、子どもの自己理解・他者理解の促進や居心地のよい学級づくりに生かしてほしい。